



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

（第四一七号）

穀雨こくう

四月十九日

齋宮貝合

春の楽しみの一つに潮干狩りがあります。潮が引いた浜で、海水に足を濡らすわくわく感、貝を見つけた時の喜びは春のものです。日本には貝塚が残るように縄文の大昔から貝を採取し、食用にしてみました。そして、平安時代になると貝殻に着目した「貝合せかいあわせ」という遊びも。貝合せはのちに「貝覆かいおほい」と呼ばれるようになります。

貝合せが書物に初めて見られるのは、平安時代後期、長久元年（一〇四〇）五月の六日のこと。齋宮さいくうで行われた良子齋王ながこが主催された「齋宮貝合」といわれるものでした。まだ十二歳の幼い齋王さいおうを喜ばせようと、貝合せの前の三月、四月は周囲の役人や女房たちが時間を見つけては近くの浜に出向き、珍しい貝、美しい貝を集めたといえます。当時は蛤に限らず、様々な貝を持ち寄って、優劣を決めるという遊びで、幼い齋王も貝の珍しい模様や形に胸をときめかせたことでしょう。ちなみに良子齋王は、齋宮歴史博物館の映像展示「齋王群行くんこう」の主人公になっています。

三月末に伊勢神宮にご参拝になった天皇家のご長女、愛子様も翌日、明和町の齋宮歴史博物館、いつきのみや歴史体験館を訪問され、歴史体験館では貝覆かいおほいに挑戦されました。愛子様は蛤の貝殻をじつとご覧になり、二つ（身と蓋ふた）を選んで手に取り、合わせました。すると身と蓋がぴたりと合あい、笑顔を見せられました。蛤は身と蓋がぴたり合うため、武家では貝覆かいおほいの貝殻を納める貝桶を婚礼の調度品として使いました。貝覆かいおほいの貝殻をじっくり見ると、なるほど模様が一つひとつ異なります。自然が創り出した造形は唯一無二のもの。古の人々が持っていた自然への細やかな気づきに触れたように思いました。

文 千種清美



おかげの里便り

おかげ横丁

○ おかげ横丁 端午の節句

5月5日は、奈良時代以前より続く古い行事「端午の節句」。

おかげ横丁では、勇ましい鎧や兜を飾り、鯉のぼりを立てて、子どもの健やかな成長や立身出世を願い「端午の節句」をお祝します。

日 時／4月27日(土)～5月5日(日・祝) 10:00～17:00(催しによって異なる)
場 所／おかげ横丁一帯

● 畳へりを使った端午の飾り作り (所要時間約30分)

日本の伝統的な色柄の「畳へり」でオリジナルの節句飾りをつくります。
「タペストリー」または「置き型飾り」のいずれかをお選びいただけます。

日 時／4月27日(土)～4月29日(月・祝) 10:00～17:00
場 所／伊勢路名産味の館2階「大黒ホール」
参加費／1,200円(税込)～

● 端午の節句タペストリー作り体験 (所要時間約30分)

伊勢型紙彫師の那須恵子氏がデザイン・制作した伊勢型紙で、オリジナルのタペストリーを作りましょう。生成りの生地に布用絵具を使い型染めします。

日 時／4月20日(土)～5月5日(日・祝) 10:00～
場 所／伊勢路裁苑 (0596-23-3077)
参加費／1,800円(税込)

● 軒菖蒲

家に邪気や災厄が入り込むのを防ぐために、強い香りで邪気を払う菖蒲や蓬などを束にして5月4日の夜に玄関の軒につるす風習があります。

おかげ横丁の各店の軒先に飾ります。

日 時／5月4日(土・祝) 夕方～5月5日(日・祝)
場 所／おかげ横丁一帯

お問い合わせ/おかげ横丁総合案内「おみやげや」電話0596-23-8838

五十鈴塾

○ おかげまいるの衣・食・住

それは約60年に1度の周期で繰り返されたという、爆発的なお伊勢参りそれを「おかげ参り」といいます。特に1830年(文政13年)の時には、当時人口の5分の1もの人々が伊勢へ伊勢へと来たといわれています。その中で人々は何を着て、何を食べて、どこで寝泊まりして伊勢にやってきたのでしょうか。病気で参りに行きたくてもいけない主人の代わりとして頼まれた犬も来ていました。柄杓をはじめとする伊勢参宮の習俗とともに、当時の伊勢参宮の具体的な様子にせまります。

日 時／4月22日(月) 13:30～15:00
講 師／太田 光俊(三重県総合博物館学芸員・博士(文学))
参加費／一般 1,450円 会員 950円
場 所／五十鈴塾右王舎

講座についてのお問い合わせ・お申込み/電話0596-20-8251

五十鈴茶屋

○ 五十鈴茶屋節気菓子

やま 山	ぶき 吹	山吹が鮮やかな黄色の花をつける季節です。 日本原産で、万葉集にも詠まれるほど古くから親しまれています。 美しく咲く姿を、白餡を包んだ薯蕷饅頭に仕立てました。
しん 神	め 馬	神宮の神馬といえば、もとは皇室ゆかりの御料馬。 毎月、1日、11日、21日の三度、参道を通り正宮前でお参りします。 御紋入りの衣をまとい、厳かに進む神馬の出立ちを真っ白な道明寺とこし餡で表しました。
みず 水	も 藻	五十鈴川の岸边から川面へ向け目をこらすと、日差しに照らされて きらきらと水藻が揺らめく様子が見えます。 その光景を葛寒天と羊羹を使い、透き通るように表現しました。